

## P4C研究会 ミーティング 2015年8月22日

大阪大学 中之島センター605 14:00~17:00

参加者：小学校教員3名・中学校教員1名・中高一貫教員1名・高校教員1名  
大学教員1名・大学生5名

概要：

今回のミーティングは、主に二人の先生の授業の詳細をうかがいつつ進んだ。

- ①小学校4年生のP4Cの授業（絵本「おおきな木」を題材にした授業）のビデオ鑑賞。
- ②小学校5年生のP4Cの授業（1学期を通して計6回）に関して授業内容と生徒の感想について細かく説明を受けた。

### ①小学校4年生のP4Cの授業

今回鑑賞したビデオは「おおきな木」を題材にした一連の授業の中の2時間である。

（それまでの授業では「おおきな木」の読み聞かせを皆で聴き、絵本から問いを立て、「思うとは何か」という問いで一度考えている）。

ビデオでは

「なぜ木は少年が年老いても少年のことを「少年」と呼ぶのか」

を問いとして話し合っていた。問いに関して一通り意見を聞いたのちに、ボールを教員に返してもらい、どのような意見が今まで出てきたかを子供たちに振り返ってもらう。そののちに、「さらに深く掘るためにはどうすればいい？」と子供たちに聞く。教員から新しい問いを提示するのではなく、子供たちが新しい問いに子供たち自身で移るように促した。その結果、次の問は

「木には少年の思い出があるが、少年には木との思い出があるのか」

となった。その後、教員の側から子供たちのそれまでの話を受けて

「思い出と思い出すことは違うのか？」

という問いが出された。

※時間的にビデオをすべて見ることはできなかった。

### ビデオを見て

- ・これまでは、1時間の中では①一つの問に集中するか、②教員の側から新しい問いを提案する、というのが一般的だったので、子供たちにその時間の中で自ら新しい問いを考えさせるのはすごい。かつ、子供たちもその期待に応えている。
- ・その場で聞いて触発されて考えたことを話していくと、前後の話のつながりが見えにくくなる。子供たちも対話を進めていく中で、発言の最初に「～さんと同じで」や「逆にいうと」などの言葉を使っていることから、話のつながりを意識していることがわかるが、全体的にはまとまりがない。子供たちもまとまりがないことにはなんとなく気づいている。そのような中では、対話を重ねても、「たくさん話したなあ」という感覚だけで終わってしまう。一度総括して次の問へと移ることも選択の一つ。単に話すだけではなく、論点を明確にしていくということ。
- ・「おおきな木」という本を題材にしているので、国語の読み取りの授業の様相になっていく面があったことも問いを変えようと考えた一因。

- ・子供たちの中から「今の発言はよくわからなかったからもう一回説明して」などといえるようになる。とすこい。
- ・「思い出と思い出すことは違うのか」という問いになってくると、問いが抽象的なので発言できる子が限られてくる。
- ・この「おおきな木」では、ほかの問も考えられうる。

「幸せって何だろう」

「時間って何だろう」

「筆者はどうしてこのような表現の仕方を選んだのだろう」

### 質疑応答形式で

Q：子供たちが、話したいことがあってもボールが回ってくるまで待つことができるのはなぜか。

A：ボールを持っている人しか話さないというルールが、1年間P4Cをやっていくうちに徹底していたから。まず聞く、という姿勢が徹底するようになっていたから。

Q：つまりながら話をしていた子がいても、教員が話をまとめてやらないのは意図的なのか。

A：意図的にそうしている。一度教員がまとめてしまうと、子供たちは教員が話をまとめてくれるのを待つようになる。

Q：「思い出と思い出すことは違うのか」ではなく「思い出とは何か」でもよいのではないか。

A：区別での問いかけは、片方をよく考えることにつながる時がある。

Q：「～とは何か」という質問の際に、「国語辞典で調べる！」という子供はいないのか

A：調べても構わないが、結局はみんな話している方が楽しい、となっていく。

### ②5年生のP4Cの授業

授業の内容、生徒の感想などがまとめられた資料を参照しながら説明をうかがう。

### 説明を受けて

- ・現在は、興味のある問いに手を挙げて多数決で問いを決めている。  
→問いを選ぶ多数決の前に、なぜその問いを立てたのかという説明や、なぜその問いを選びたいのかの理由を聞くのもいいだろう。あるいはあえて過半数を超えていないような問を選ぶのもよいかもしれない。
- ・コミュニティ・ボールは本当に大切。いままではぬいぐるみをボールの代わりにしていたが、子供たちのぬいぐるみの扱いは乱暴だった。年間を通してP4Cをやっていくならば、みんなで糸をまいて作ったボールという前提があることが重要。
- ・コミュニティ・ボールを投げるときも、自分と仲の良い人ばかりに投げてしまう子もいるが、「この人は今日そんなに話してないな」と思いやって投げることのできる子もいる。それも一つの人権意識。

### P4Cは道徳か？

- ・「道徳」というと教育学的には友情、誠実などの「価値」を教えることに重点を置く面がある。そう考えるとP4Cは自分が今まで学んできた道徳とはだいぶ違う。（大学生）
- ・読み物教材を使用しても良い授業ができるのではないか。

## 現在の教育改革の流れを受けて

- ・ 価値観を教え込む場ではなく、価値観をぶつけ合う場としてP4Cはあることができる。しかし教科化されると、教科書と異なる価値観が提示された場合はその生徒の評価を下げなければならなくなるのか？
- ・ 授業を受ける前後での生徒の変容・気づきで評価しようという案も出ているようだ。
- ・ しかし教科化に伴って、教員が生徒に価値を教え込む、価値を与えてやるという点に危険を感じる。むしろ哲学は、そのような価値を批判的に見る（P4Cもphilosophy=哲学）。
- ・ 道徳+総合のような流れができてきている。アクティブ・ラーニングという点が強調されてきている。P4Cはアクティブ・ラーニングとは精通するが、そこだけに注目されると最も大事なセーフティーがなくなってしまうのではないかと恐れる。
- ・ アクティブ・ラーニングとは自分たちでコミュニティを作っていく力
- ・ P4Cをやるにしても、学際性、様々な分野とのネットワークづくりは大切
- ・ 多様性と対話が重要。

## 生徒間での対話の結果として、もし反社会的結論に至ってしまっても、それも相対主義的に認めてしまうのか？

- ・ 子供たちの中にも反社会的なものに対する反論が存在する。そう簡単に反社会的な結論に子供たちは流されない。かつそのような場合は先生もその輪の中で対話に加わる一員として、自分の考えを述べるができる。
- ・ 価値をただ教えて、それについて生徒がうなずいていたからといって、本当に伝わっているとは限らない。
- ・ 先生が自分の考えを述べてしまうと、生徒はもしその先生の意見に違和感を感じても口に出すことができないのではないか。
- ・ P4Cでは「対話は成立する」・「人は疑問に思ったことをその場で言い合えるのだ」という前提がある。P4Cに関わる人の多くはP4Cがそのような場であると信じている人だろう。それは楽観主義だと取られがちではあるが、言葉をお互いに交し合えるということを知っているかどうかということが大きいだろう。
- ・ P4Cはいつでもどこでも自分からセーフティーのあるコミュニティを作る力を育てる。そのような力を持っていることがすなわち社会人になるということ。自分たちで関係性を作るすべを持ち、よい雰囲気を作っていくという感覚を知っておくことが大切。
- ・ 価値には①答えが一つになるものと、②人それぞれ違ったものを持っているものと二つの種類があるように思う。①は殺人してはいけないなど一意に定まるが、P4Cで扱うのは②の方だろう。自分の中にある価値観をセーフな場所の中でだしあうところにP4Cの良さがある。
- ・ 加えてP4Cの場では単に自分の価値観を提示するだけでなく、その価値観が了解される場所であることが大きい。共有できるか、できないなら説明を加えて、これならば了解できる、というところまで一緒に行く。身体的に納得する、「腑に落ちる」という感覚があるところまで。